

## 高齢化・過疎化の進む農村の活性化方策 グリーンツーリズム

### 1 グリーンツーリズム 導入によって 交流人口を創出

わが国の農業は、不況の長期化、農産物の価格低迷などにより、厳しい経営状況におかれています。この結果、中山間地を中心として、後継者不足と高齢化が深刻化しています。農村復興の基本は、農業を中心に地域産業を振興し、農家の所得を増加させることです。地元での取

### 2 農村の知恵が 成功の鍵を握る

もともと農家には、農村ならではの味噌や漬物、豆腐など食品加工の知恵を生かした自然食品づくりが継承されていて、これらの地域資源がグリーンツーリズムにより広く知られ、商品化に

り組みとしては学校給食など、行政や農協が主体となった地元消費すなわち「地産地消」が大切です。しかしこれには限界があります。都市から、都市農村交流を進め、交流人口を増加させ、農産物の販売量を拡大する必要があります。近年、都市農村交流の有効な方法として、グリーンツーリズムに取り組み



茅葺屋根が来訪者を迎える新潟県高柳町

### 3 グリーンツーリズムの 効果

グリーンツーリズムの舞台となる農村部では、次世代層が都市部に流出した結果高齢化が進んだ地域と、後継者が育つている地域とでは、グリーンツーリズムの目的や効果にも違いが出てきます。

### (1) 高齢者中心の地域を維持活性化する効果 ～地域社会の維持に外部の力が必要

高齢化が大きく進んだ地域で、一層を中心とする宿泊客を、安定的に集めています。四月から十一月の観光客数は、平成四年度の三十万人から、平成十二年度には九十四万人に増加しています。

### 4 グリーンツーリズムを 支援する事業制度

グリーンツーリズムを支援する主要な事業制度とその対象をご紹介します。

新潟県高柳町では、町の観光資源として「かやぶきの里」を指定し、茅葺き屋根の補修や除雪など、多くの労働力が必要な作業について、グリーンツーリズムにより首都圏から参加者を集めることによって対応を図っています。冬季には旅行代理店と提携して「雪下ろしツアー」を実施し、都会では経験できない雪国の農家の生活を体験させています。このようにして地域に必要な労働力を確保し、更に高齢者をはじめとする地域住民にもてなしの心が生まれるなど、地域の閉塞感の緩和にも寄与しています。

### (2) 次世代層に雇用機会と生きがいをもたらす効果

～グリーンツーリズムを活用して生きがいと働く場を確保～  
現在、若者を含む次世代層が、働き手の中心となっている農村地域では、今後も継続して若者の定住やリターン者の増加に取組む必要があります。その際、雇用増に結びつく可能性のある事業として、グリーンツーリズムが期待されています。こうした地域では、若い年齢層も対象とした、グリーンツーリズムビジネスとも呼べる農家レストランやファームインへ農家宿泊施設などの開業が有効とされています。農家の主婦としての知識と現代的な感覚を持った農村の若い主婦層は、その事業者として適しているものと考えられ、農村の女性層に新たな生き甲斐を創出するという側面もあります。

ただしグリーンツーリズムの本質は静かな旅であり、都市にある施設をそのまま農村に出現させることは、もともとの景観など、農村が本来持っていた地域資源を損なう恐れがあります。長野県飯山市では、冬季のス



飯山市のグリーンツーリズムの拠点「なべくら高原森の家」

事業制度名	対象
都市農村交流対策事業	グリーンツーリズム実践計画策定、小中学生の自然・農業体験、都市の高齢者の農業・農村体験
やすらぎの交流空間整備事業	ログハウス付農園整備、廃校・廃屋を活用した交流拠点整備、伝統文化伝習施設や野外舞台の設置
都市農村交流情報発信対策事業	農村から都市への情報発信ワークショップの開催 農家民宿から都市への情報発信ワークショップの開催
都市農村ふれあい農園整備事業	市民農園のプラン作成、農園の園路・休息室・シャワー室等の整備

# 「グリーンツーリズム」モデルケース 大分県安心院町 「会員制の農村民泊」 地域観光資源を 日常生活に見出した グリーンツーリズム事業



問い合わせ先  
大分県宇佐郡安心院町  
商工観光課 電話0978-44-1111  
安心院町ホームページURL  
<http://www.oec-net.or.jp/ajimu/welcome.html>

人口八千六百三十五人、世帯数二千九百七十三（平成十三年三月末）の大分県宇佐郡安心院町では、農業者の減少・高齢化に対抗する方策として、グリーンツーリズムに取り組みました。

成功のポイントは二つ考えられます。第一に農村の日常的な姿が最大の地域資源であると気付いたこと、第二は、住民が知恵を絞って旅館業法等の規制をクリアして事業を進めたことです。

西日本有数のぶどう産地として知られる安心院町ですが、離農者の増加や農家の高齢化が進み、農村の将来に明るい展望が描きにくくなっていました。しかし、農村の活性化に意欲を持った有志が研究会を作り、新たな取り組みを模索していたところグリーンツーリズムに出合い、会員制の「農村民泊」（安心院町の造語）の仕組みを編み出しました。それは農村の普段着の生活のまま、遠い親戚を迎えるように来訪者をもてなすものです。その素朴さや農家の人たちとの家族的な交流が評判となつて宿泊客が急増し、テレビ、新聞、雑誌からも注目されています。

平成十三年十一月には、安心院町のグリーンツーリズムが地域活

性に深く貢献しているとして、国土交通省の地域づくり表彰の「全国地域づくり推進協議会会長賞」に選ばれています。

## 1 農業者減少の歯止め策を検討

### （1）農業者以外も検討に加わる

安心院町には、約千六百軒の農家があります。しかし農家の高齢化、離農者の増加が徐々に進行し、農村の低迷を食い止めるための新しい取り組みが必要になっていました。

「土からものを作るだけでは農業を営むことが困難になっている」として「ツーリズムは農家に副収入をもたらす可能性がある」との認識の下に、平成四年八軒の農家が集まり、アグリツーリズム研究会が設立されました。当時から会長を務め、自らもぶどう園を経営する宮田静一会長は、「自らが作った農産物に自分で値段を付けたい」と思い、観光農園、産地直送などについて勉強を始めた」と言います。しかし途中で、高齢者が多い農家だけでは力不足になることに気がつき、平成八年三月から、

農家に限定していた枠を取り払い、町や県の職員、商工業者、会社員など農家以外のメンバーも加え、三十五人で新しい研究会をスタートさせました。

### （2）農村民宿を起業化

安心院町では大分県下でも大規模なイベントとして知られる「ワイン祭り」を毎年九月の第二土、日曜日に開催しています。宿泊客の増加に対して町内の宿泊施設は四施設に限られていたため、研究会では平成八年の「ワイン祭り」において、「農家に泊まってワイン祭りに参加しませんか」と、農家での宿泊を体験してみることにしました。

西日本新聞、大分合同新聞に広告を出したところ、約三十名の宿泊客が集まり、七軒の農家が宿泊先になりました。手探りの実験でしたが、結果は、宿泊客も農家も楽しく交流ができて好評を得ることができました。この実験的な「民宿」が成功したことによって、農家も宿泊者の受け入れに自信を持ち、平成九年以降の「農村民泊」の実現につながりました。

そして、安心院町のグリーン

## 2 旅館業法規制を運営の工夫でクリア

### （1）農村の日常的な姿が最大の地域資源

安心院町ではグリーンツーリズムについて「地域に生きる一人ひとりが農村での日頃の生活を楽しく送る中で、外からのお客様を暖かく迎え入れることのできる《豊かに輝く農村》を目指す」と考えています。そして、農村の日常的な姿こそが最大の地域資源と捉え、普段着のままの田舎のホスピタリティ（もてなし）を実践しています。安心院町の「農村民泊」では「心のせんとく」をキャッチフレーズとして掲げ、来訪者は「遠くの親戚」とみなしてもてなしを行っています。

### （2）農家の負担を軽減した「会員制の農村民泊」

「農村民泊」の実施に際して一番のネックとなったものが、法的制約でした。通常、不特定多数の人を対象とした宿泊施設を通年的に開業しようとするに旅館業法、食品

ツーリズムの方向性を決定付けた出来事だが、この実験の二カ月後に実施された海外先進地視察研修です。研究会の有志が自発的に資金を積み立ててドイツの農家民宿を視察に行き、そこで「グリーンツーリズムが産業として成立していること」各農家が空いている部屋を使って、さまざまな食事の提供で営業していること「農村ではヘッド数までは無許可で民宿を開業できること」「こみ一つ落ちていない美しい農村が維持されていること」を目的にしました。視

察した宮田会長は感心するとともにグリーンツーリズムこそ安心院町が生き残る道だ。安心院町でも絶対にできる」と確信し、これが「農村民泊」誕生のきっかけとなりました。

### （3）生産農業とグリーンツーリズムを融合

研究会の宮田会長が推進役となつて説明会を開催し、「農村民泊」への参加を呼びかけました。野球好きの宮田会長は「野茂英雄投手は、フォークボールという宝刀を持つことにより、

世界の野茂になりました。強い直球（生産農業）とフォークボール（グリーンツーリズム）の組み合わせの中にこそ、新しい農村形態を時代の中に見つけるような気がします。さあ、勇気を持ってフォークを投げてみませんか」と説明したそうです。「ワイン祭り」で「民宿」を実験していたことが役立ち、当初は躊躇していた農家も、宮田会長の熱意と人柄に促され、平成九年度、八軒の農家が参加して「農村民泊」を開始することになりました。

## 安心院町のグリーンツーリズム活動の流れ

- 平成4年 アグリツーリズム研究会が発足
- 平成8年 グリーンツーリズム研究会に組織変更、農村全体の活性化を目指す  
ワイン祭りで実験的に体験宿泊を実施、好評を博す  
研究会有志がドイツの農家民宿を視察（以降毎年実施）
- 平成9年 安心院町、グリーンツーリズム推進宣言  
支援組織、グリーンツーリズム推進協議会を設立
- 平成11年 全国薫こずみ大会第1回大会を開催（以降毎年開催）
- 平成12年 全国紙に安心院町のグリーンツーリズムが掲載、以降宿泊客急増  
大分県立商業高校の体験学習受入れ
- 平成13年 全国初グリーンツーリズム推進係を設置  
国土交通省の地域づくり表彰で「全国地域づくり推進協議会長賞」受賞  
JR九州が安心院町の農村民泊を取り入れ



矢野俊彦さん  
英子さん  
「龍泉亭」主宰

最初に農村民泊をやらないかと誘われたときには、正直迷いました。しかしお父さん（ご主人）が退職してからの人生で夫婦が一つの目的に向かって力を合わせることもできる魅力もあり、町のために何か新しい取り組みも必要と感じていましたので、道を切り開くお手伝いをしようと思いいりました。実際やってみると、皆さんに喜んでいただけて今まで兼業農業を続けてきた苦労が報われました。今が人生で一番幸せです。

衛生法、消防法が適用されます。中でも旅館業法の制約は大きく、民宿であっても、最低客室面積が三十三平方メートル以上ないと営業できない規定があります。比較的に大型の家屋である農家であっても、三十三平方メートル(二十畳)以上を客室とすれば、家族の居場所がなくなりません。現行の旅館業法に沿って客室面積を確保するとすれば、数百万円以上の改築費用がかかります。そんなことは誰も「農村民泊」を実現できないため、どうにかして規制をクリアする方法はないものかと考えていた時、会員制にして「特定の人」を宿泊させるアイデアを得て、実現化の道を拓きました。

安心院町の「農村民泊」では、宿泊希望者には会員登録をしてもらい、「特定の人」が農村文化を体験すると捉えています。その謝礼として、農村文化体験料(一泊朝食付き四千元、一泊夕食朝食付き五千元)を安心院町グリーンツーリズム研究会が受け取る方式にしています。これによって農家は新たに改築することなく、「農村民泊」を行うことができ、この参入のしやす

さが、安心院町の「農村民泊」を広げる要因になっていきます。経済的に無理をしていないことが「惜しみのないもてなし」を支え、それが宿泊者感激させて「リピーター」や「口コミ」を生み出して宿泊客を増加させる好循環を作っています。

### (3) 行政は側面支援

安心院町のグリーンツーリズムは民間主導でスタートしましたが、行政側も農村の活性化のために何か新しい取り組みが必要と考えていました。そこで平成九年三月に安心院町は、「グリーンツーリズム推進宣言」を行い、さらに議会、農協、商工会など町内の団体を集めたグリーンツーリズム推進協議会も同年九月に組織化して町をあげてグリーンツーリズムを支援する体制を整えました。

しかし、行政側の支援の中で最大のものは、平成十三年四月に全国でもはじめて「グリーンツーリズム推進係」を役場に設置したことです。専任の係長が、宿泊受付、内容紹介、視察や取材の対応などを行っています。

宿泊者は農家と精神的な絆ができます。その証拠に宿泊客の三分の二以上の方からお世話になった農家に年賀状が送られて来ます。安心院町では、「十泊した人には冠婚葬祭の案内を送り、本当の親戚付き合いを開始する」と決めています。

### (2) 「農村民泊」の成果

利用者は順調に増加。「農村民泊」を開始した平成九年度の年間宿泊客数は約百名でした。それが順調に増加し十三年度は二千名を超えています。何も無かったところから大規模な施設整備をすることなく約一千万円の収入が、農村民泊農家にもたらされたこととなります。

#### 地元産品の販売に貢献

安心院町は西日本一のぶどうの産地であり、「農村民泊」農家ではドイツの農家民宿のように地ワインを味わうことができます。この「安心院ワイン」は甘口で土産物としても人気があり、旬の野菜とともに町内二カ所の直売所で販売され、宿泊客の増加とともに売上げを伸ばしています。



安心院町は盆地の町、四方を山に囲まれています

## 3 「農村民泊」の特色と課題

### (1) 「農村民泊」の特色

安心院町の「農村民泊」は、研究会有志が一番感激したドイツの農家民宿を手本にしています。その特色は次の通りです。

経済的負担なく参入が可能  
「農村民泊」ではホームステイを受入れるように、農家の空いている部屋が宿泊客に提供されます。農家側には客室の増築

といった初期投資がありませんので、経済的な負担なく「農村民泊」を無理なく始めることができます。

農作業時間を確保した無理のない営業時間  
「農村民泊」を実施しても今まで通り農作業ができるようにチェックインは十七時にしています。「農村民泊」を実施している農家は約三十軒ありますが、その中で常時十軒が受け入れ可能になっています。つまり農繁期や農家の個人的都合を優先して営業を休むことを前提にしており、農家が無理せずに「農村民泊」を継続できる仕組みになっています。

自家製のもてなし  
夕食や朝食には、各農家が栽培した野菜、自家製の味噌、豆腐、漬物がふんだんに提供されます。農家では自家製の食品が当たり前ですが、宿泊者にとっては手間暇かけた価値ある食べ物であり、新鮮な感動を与え

全国ネットのテレビ番組でも放映されています。また、平成十三年度の視察客だけでも百十組を数えています。

### (3) 課題と対応策

会員制農村民泊の法的根拠の確立  
「農村民泊」では会員制を導入して宿泊客を「特定の人」とみなし、旅館業法の規制をクリアしたと考えています。しかし法的根拠が明確ではなく、農家が自宅を活用して民宿を開業できるように規制緩和を求めていることが必要になっています。(経団連も平成十二年十月の「二十一世紀のわが国観光のあり方に関する提言」の中で、農家の民宿開設に関して規制緩和を提案しています。)

#### 町民が納得する行政支援

安心院町が研究会に対して実施している経済的支援は、配布物の印刷費、セミナー講師料、イベント補助費に限定しています。これは、他人を自宅に泊めることに抵抗がある町民もいるため、配慮しながら支援を行っているためです。グリーンツー

これが「農村民泊」の魅力の一つになっていきます。

人数限定で家庭的もてなし  
「農村民泊」では宿泊客と農家の家族と一緒に食事をします。そして「遠くの親戚」を迎える場合と同様に「どんどん食べて」と惜しみなく料理が提供され、語り合いが続きます。家庭的なもてなしを実現するため、原則として各農家は一日一組五名程度までの宿泊客しか泊めません。

#### 精神的な絆の構築

「農村民泊」では、農家の家族が宿泊客の話し相手となり、食事後も語り合いが続きます。人生経験豊かな六十歳代の夫婦が「農村民泊」を主宰している場合が多く、その穏やかな人柄が加わって宿泊客が話しやすい条件が整っています。自家製のかき餅を食べながら、ゆっくりと語り合うことによって宿泊客はストレスを解放し、ホスト役夫婦は無意識のうちにカウンセラーの役割を果たしています。料理という形あるもてなしと同時に、心のもてなしを受けて、



安心院町の冬の風物詩「わらこずみ」

リズムが農村の活性化に役立ち、地域全体の振興にも貢献することを町民に伝える必要があり、研究会では、町内全戸に対してチラシを配布して、活動の理解と普及に努めています。

#### 「農村民泊」の普及

現在「農村民泊」を実施している農家は約三十軒です。これは安心院町の農家の2%にすぎません。また夏場などは宿泊希望が多く予約を断っている状況であり、「農村民泊」参加農家を増していく必要があります。そこで安心院町と研究会では町内の農家が農業生産を基礎に置きつつ「農村民泊」を試み、副収入を確保して経営基盤の強化ができるように、講演会や視察研修を行い、グリーンツーリズムの普及に努めています。

#### 参入に個人的資質が必要

農村民泊では、他人を泊めて一緒に食事をし、さらに風呂やトイレも共用することになりますので、参入には「思い切り」が必要です。初めて他人を迎え入れた農家では、当初どういった人が泊まりに来るのか不安で仕

感じ取ることができます。

#### こうした「農村民泊」の持つ

無垢な特性も維持しつつも、農家の経営基盤の強化と農村の経済面の活性化に役立てるためには、宿泊客数を拡大させる必要があります。

安心院町では、平成十二年に大分県立商業高校の二年生の体験学習を受け入れました。三百二十名の生徒を一時に受入れることができないため、四班に分けるとともに、一時的な「農村民泊」農家にも学生を受け入れてもらいました。また平成十四年度は関東地方の公立高校の体験学習を受け入れて欲しいと大手旅行代理店から要請されています。学校単位の農村体験をどのように受入れていくかが、今後の課題にもなっています。

安心院町が考案した「農村民泊」は、今大分県内に広がるようになっていきます。研究会が中心となって、平成十四年四月二十七日に、安心院町内で「大分県グリーンツーリズム研究会設立総会」を開催する予定です。安心院町から始まった活動が「一村一品農村民泊」に広がるようになっていきます。

方なかつたそうです。しかし五年が経過しても問題のある人はなく、接客にも次第に慣れて、会話を通じて宿泊客の反応に感じた対応が次第に取れるようになったといえます。それでも、農村民泊を続ける上では、家族の中で「話好き」「世話好き」「料理好き」といった資質のあるホスト役が必要になります。農村民泊の参入には、初期投資のハードルはありませんが、通年的に営業を行う上では、料理や接客を負担に感じない性格であることが必要になります。

#### 個性の尊重とサービスの標準化の調整

農村民泊では、「一軒一軒違う個性があること」を売り物にし、各農家が提供する料理も異なります。しかし、学校の体験学習といった団体客を受入れるためには、料理や体験学習の内容については「標準化」を図ることも必要になっていきます。また、若い農家の参入を促すためにも接客、対話、臨機応変な対応方法について「先輩農家」のノウハウを整理することが必要です。宿泊客数と参加農家の増加、さ

### 高田文義町長の言葉

## グリーンツーリズム推進係のある町

平成8年に町民の方々が中心となり、「グリーンツーリズム研究会」が結成されて、安心院町のグリーンツーリズム活動が始まりました。「安心院町を大切に守り、住む人が町に愛着と誇りを持ち、訪れる人々を大切にもてなしたい」という純粋かつ真剣な考え方が、研究会設立の背景になっております。

安心院町のグリーンツーリズム活動は、すでに6年が過ぎようとしておりますが、この間、町に与えた影響は計り知れないものがあります。研究会の活動の広がりが町や議会を動かし、全国に先駆けて「グリーンツーリズム推進宣言」を町が宣言し、全町上げての取り組みへとつなげるべくグリーンツーリズム推進協議会も設立されたわけであります。また、平成13年4月には、庁内の機構改革に合わせて全国初の「グリーンツーリズム推進係」を設けました。「農村民泊」という安心院町独自の方式や活動は、大分県下はもちろんのこと、全国的にも高い評価を得ており多数の視察者が本町に訪れています。

農山村の全国的な過疎化の中、わが町においても過疎化が進行しています。これからは人口が減少しても、そこに住む人々が輝きを失わず、「訪れる人々に安心院の空間と時間を楽しんでいただきたい。農村を基本とした自然・文化・人情にふれていただきたい」これが我々の切実な願いでもあります。結果として、交流人口の拡大によって物心ともに潤う「安心の里づくり」を目指していきなさいと考えております。

グリーンツーリズムは、まさしく農山村の生き残りをかけた政策の一つであります。平成12年度からの新しい過疎地域自立促進計画の策定においても、従来の定住政策に加え交流施策の充実を掲げており、初めてグリーンツーリズムの推進を計画に盛り込みながら、支援体制の強化と住民コンセンサスの拡大を図ろうと考えているところであります。また、全国総合開発計画においては「過疎地域」とは呼ばず、今までとは違った発展の仕組みを農山村自らが創造していく必要性から「多自然居住地域」という発想も生まれております。

この安心院に残された、やさしく美しい自然や景観等の地域資源を最大限に活かしながら「多自然居住」の地域づくりに向け、研究会の先見性と行動力に行政の力をプラスし、不動の地域政策となるようともに手をつなぎながら歩んでまいりたいと考えております。



宮田 静一さん  
直昌さん  
グリーンツーリズム  
研究会会長

安心院町のグリーンツーリズムは、農村民泊のオアシスやオバサンが一番の資源です。農家に泊まってゆっくりと語り合って「心のせんだく」ができるから、また訪ねたくなるのです。私は農家に全く負担のかからない「安心院方式の農村民泊」をまず町内に広めて定着させ、その次には大分県内にも広げたい。農村が生き残るにはグリーンツーリズムしかないと考えています。

### 4 今後の展開

安心院町の「農村民泊」を機面から眺めれば「宿泊と食事



河野 洋一さん  
安心院町  
グリーンツーリズム  
推進係長

安心院町では、農家も町もハードにお金をかけていません。農家の日常生活そのものが売り物で、家族のように宿泊客を迎えています。これはホテルや旅館でも真似ができません。最近マスコミの取材や視察が多く、とても忙しいですが、最大のPR活動と捉えています。テレビ放映の直後は、一日百件を超える問い合わせが全国からあって反響に驚いています。

の提供」をしており既存の民宿と同様です。しかし「農村民泊」では宿泊客を一日一組に限定し、しかも農村に関心のある人を家族同様に受入れており、短期間のホームステイ先を提供する活動と言えられます。

旬の食べ物、新鮮な食べ物、自家製の食べ物も豊富にあり「さあ食べなさい」ともてなす農家の豊かさに触れることにより、食べ物消費地に提供し続けてきた農村の役割の重要性や農村が育んできた大らかな風土を、宿泊者は無意識のうちに